魔法少女リリカルなのはStrikerS　LOSTMAGIC

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ＬＯＳＴＭＡＧＩＣ

【Ｎコード】
Ｎ８１４６Ｔ

【作者名】
六甲水

【あらすじ】
ＪＳ事件が起きる２年前、とある世界の研究所が謎の襲撃により破壊された。それから２年の月日が立ち、ミッドチルダに二人の少年が訪れる。少年たちが求めるのは失われた魔法『ロストマジック』。ロストマジックをめぐる戦いが今、始まろうとしていた。

キャラ紹介（前書き）

今回はオリジナルキャラのキャラ紹介を行います。あとロストマジックの説明も

キャラ紹介

ロスト部隊

サクヤ・キツキ

年齢　１９歳

魔導師ランク　Ｓ

デバイス　ゼーガ

備考

ロスト部隊の一人、昔フーレに拾われて、それ以来フーレに付いて行っている。エクスと共にロストマジックの捜索中になのはと出会う。

魔導師としてはあまり強くないが、騎士としての能力はかなり強い方である。基本的に自分から話しかけない。

魔法

黒鴉

抜刀すると同時に、魔力を込め、敵を爆殺させる。

サクリファイスブレイカー

ロッド状態で撃つことが可能の集束砲。ただし魔力を貯めるのに3分必要である。だが、その威力は絶大でもある。

アサルトフルバースト

なのはの使うアクセルシューターを巨大化させた技。威力は大きいが、狙いを付けることが出来ずに無差別に魔力弾を放つ。

???

サクヤの隠された魔法の一つ。

エクス・ハルート

年齢　19歳

魔導師ランクB

デバイス　ハルクリッド

備考

ロスト部隊の一人。昔ティアナの兄、ティーダと同じ部隊にいたことがあるが、ゴスペルにティーダを殺害され、そのショックで管理局をやめた時にフーレと出会った。人付き合いがよく、同じ部隊のフーレやサクヤのフォロー役に回る。

魔法

エレトリカルサイズ

ハルクリッドに電気を纏わせながら鎌を回転させ、電磁波を相手に当てるという技

エレクトリカルパニッシャー

ハルクリッドを激しく回転させるとエクスの頭の上に白い球体を敵に当て、爆発させる。

エレトリカル・パニッシュ

白い魔力弾を何十発を相手に向けて放つ魔法

雷撃魔鎌

雷を纏ったハルクリッドで相手を切り裂く。

黒影の礫

ロストマジックの魔力弾。

クロスシャドーシュート

ティアナのクロスファイヤーと似たような魔法

フーレ・ライン

年齢　不明　見た目１５歳くらい（時の波紋を使用して年齢をごまかしている）

魔導師ランク不明

デバイス　不明

備考

過去の経歴が一切不明のロスト部隊隊長。普段は着物をきて過ごしている。何らかの理由でロストマジックを集めている。人をおちょくることが好きで、エクスをからかっていたりする。スバルと仲がよく、ティアナとエクスの仲を進めようとしている。

魔法

時の波紋

『時間停止』　『時間逆行』　『未来予知』の時に関する能力を使っている。ロストマジックの中で最強に近い能力であるが、使用者の適性を選ぶ。

ドーマ一族

アリエッティ・ドーマ

年齢　１４歳

魔導師ランク　不明

デバイス　宵の月を紅い剣に形を変えた。

備考

ロストマジックを狙う一団の一人、宵の月を使用し、さらには剣術、魔法の能力がかなり高い。人を殺すということに関して無関心な部分がある。

魔法

破滅の序章

紅い剣を地面に突き刺した瞬間、空から無数の光の矢を降り注がせ、命中した相手の生命力を奪う。

エネミー・ドーマ

備考

ドーマの一団の一人、ロストマジックの一つを所持している。

アナザー・ドーマ

備考

ドーマ一団の一人、ロストマジック『十二宮魔法』の捜索で別の次元にいるが、とある人物に体を乗っ取られて、死亡した。

ゴスペル

金髪の男と銀髪の男

備考

ロストマジックを破壊しようと動いている二人組。その能力は不明だが、かなり強大な力を持っている

ロストマジック

死を免れない人間の運命

属性　死

時の波紋

属性　時

氷に覆われた世界

属性　絶氷

宵の月

属性　負

深淵を貪りし者

属性　影

黄道十二宮

属性　光

狂った運命の歯車

属性　魔

第1話　始まりの物語（前書き）

六甲水「というわけで、始まりです。」

サクヤ「……」

エクス「始めるのはいいが、更新してない奴いっぱいあるんじゃないのか？」

六甲水「それは……まぁ、少しずつ書いてるから……」

第1話　始まりの物語

2年前、とある管轄外世界の研究所が一人の魔導師の攻撃で破壊された。研究所は燃え上がり、その光景を上空で見つめる二人の男達がいた。

「やりすぎではないのか？いくらアレが復活するとはいえ……」

「……ロストマジックは危険だ。そしてここで研究されていたロストマジックは決して目覚めさせてはいけない。貴様も分かってるだろ。」

「あぁ、そうだが……」

「俺らの任務は終わった。戻るぞ」

二人の男は一瞬の内にその場から姿を消すのだった。だが、彼らは気がつかなかった。研究所の爆破でフラスコの中に閉じ込められていた一人の少年を……

現代、ミッドチルダ・グラナガンに二人の少年が街を歩いていた。

「なぁ、本当にここに奴らが出る可能性があるのか？」

茶色の髪に、黒い服を着た１６歳くらいの少年がもう一人の少年に尋ねた。少年は無表情で端末をいじりながら答えた。

「……あぁ、ボスの情報ではあと数分すれば俺達の目の前に機械型の兵器が現れるらしい。」

黒い髪に、白い服を着て、腰には黒い刀を身につけた１６歳くらいの少年が質問に答える。茶髪の少年はつまらなそうにしていた。

「そうだけどよ。機械型の兵器って、奴らの奴じゃない可能性だってあるだろ。ほら、最近騒がしいガジェットって奴かもしれないし……」

「それだったら俺はそれを潰す。」

「お前は単純でいいよな。俺は嫌だぜ。ヘタすれば管理局と関わることになるからな。」

「勝手にすればいい。それよりそろそろボスが指示した時刻だ。」

黒髪の少年がそう言った瞬間、突然どこからか爆発音が聞こえた。

「おいおい、ボスは俺達の目の前に現れるんじゃなかったのか？」

「今はそんなのは関係ない。奴らなら行くぞ。」

二人は爆発が起きた場所に向かうのだった。

二人がたどり着くとそこには無数の丸い球体兵器ガジェット・ドローンがビルを壊していた。そしてそれらに対応する白い魔導師がいた。

「おいおい、どうやら機械兵器はガジェットだったぜ。ここはアイツらに任せて帰ろうぜ。」

「あぁ、」

二人はその場を離れようとした瞬間、二人の前にガジェットが大量に出現した。その事に白い魔導師も気がつき、二人の前に出た。

「君たち、一般人。ここは私たちが何とかするから逃げて……」

白い魔導師、栗色の髪にツインテールの女性が二人に注意を呼びかけるが……茶髪の少年はめんどくさそうにしながら答えた。

「いや～、もうめんどくさいから俺らは俺らで片付けさせてもらいます。なぁ、朔耶。」

「あぁ、やるぞ。エクス」

二人の少年……朔耶とエクスはそれぞれのデバイスを取り出した。朔耶は黒い鈴を、エクスは銀色の宝石のデバイスだった。

「セットアップ。ハルクリッド」

「セットアップ。ゼーガ」

朔耶がゼーガを、エクスをハルクリッドを起動させ、それぞれのバリアジャケットを身につけた。朔耶は白い陣羽織と黒い刀を身につけ、エクスは黒いコートに白い鎌を装備した姿に変わった。

「さてと、やりますか。朔耶」

「あぁ、任せろ。エクス。」

「あ、貴方達は……」

二人の姿を見て白い魔導師は驚きを隠し切れなかった。二人はそんなのをお構いなしにガジェットに向かっていった。

エクスは何体ものガジェットに突撃し、エクスが通り過ぎた瞬間、ガジェットが全て切り裂かれていた。

「神速の鎌の味はどうかな？」

ガジェットは遠くから砲撃をしてきたが、エクスはそれらを全て鎌を回転させ防ぎ、左腕に装備した篭手に白い魔力弾を放ち、ガジェットを破壊した。

朔耶はガジェットが大量に集まる場所のど真ん中にいた。

「さて、ゼーガ。何体いる？」

朔耶の胸には黒い鈴、ゼーガに呼びかけるとゼーガは答えた。

『およそ、十体ですね。射撃にしますか？それとも黒鴉にしますか？』

「いや、黒鴉で十分だ。」

朔耶は黒い刀、黒鴉を鞘から抜いた瞬間、十体ものガジェット全てが切り裂かれ、爆発した。そしてあっという間にさっきまでいたガジェットを全て破壊し終わった。二人はＢＪを解除しどこかへと行こうとした。すると、さっきの白い魔導師が呼び止めた。

「そこの二人。ちょっといいかな？」

「あー、えっと、何でしょうか？俺ら急ぐとこがあって……なぁ、朔耶」

「ただ協力しただけだ。それだけ、それならお前ら管理局に話すことはない。行くぞエクス」

朔耶はそう言って、二人はそのままどこかへ行こうとすると、エクスが持っていた携帯端末に通信が入った。

「おっ、もしもし、」

『あー、二人とも任務ご苦労様。どうやら奴らじゃなくってただのガジェットだったみたいだけど……』

「そうなんだよ。そしたら襲ってきたからよ。つい相手にしちゃうわ。管理局の魔導師に事情を聞かされそうになったんだけどよ」

『それだったら、彼女の言う通りに従って、』

「はぁ？いいのかよ。それだとアイツらの情報が……」

『大丈夫よ。詳しいことは私から話すわ。というか私も行くから』

「ちょ……切れやがった。」

エクスはため息を付き、朔耶の方を向くと朔耶は無表情で立っていた。

「ボスは何だと？」

「管理局の姉ちゃんのいう通りに従えって」

「……ボスがそう言うのなら……」

二人は白い魔導師の所へ戻った。白い魔導師は二人が戻ってきたことに少し驚いていた。

「二人ともどうしたの？」

「いや、ちょっとな。悪いんだけどあんたの指示に従う事になった。」

エクスが説明すると、白い魔導師が苦笑いをした。

「なるほどね。貴方達はそのボスの指示で私に付いていくようにって言われたんだ。」

「そうなんだよ。なぁ、朔耶」

「あぁ、悪いが俺はボスの意志に背くことが出来ないからな。」

「そ、そうなんだ。とりあえず自己紹介。私は高町なのは。」

「エクス。エクス・ハルート」

「サクヤ・キツキ。」

こうして二人は高町なのはと出会うのだった。

第1話　始まりの物語（後書き）

六甲水「というわけで、第一話終わったね。」

エクス「そうだな。というかこれって主人公俺か？それともサクヤか？」

六甲水「うーん、サクヤが主人公なんだけど、ぶっちゃけ四話まで書いてたらエクスが主人公みたいな感じに……まぁ、ダブル主人公というわけで」

第2話　部隊名　ロスト（前書き）

六甲水「というわけで第2話です。」

エクス「今回の話は？」

六甲水「君たちの部隊名と上司の登場かな」

第2話　部隊名　ロスト

サクヤとエクスの二人は二人の上司の命令で、管理局の魔導師、高町なのはと共にミッドチルダのある場所にきていた。そこは新たな機動部隊機動六課の隊舎だった。そしてその入り口に金髪の女性が立っていた。

「なのは、大丈夫だった？」

「うん、大丈夫だったよフェイトちゃん。それにこの二人が助けてくれたから。」

「いやいや、助けたわけじゃないけど……」

エクスは咄嗟に言い訳をするのだが、なのはは事情を説明すると、フェイトと名乗る女性は笑顔でサクヤとエクスを見た。

「ありがとうね。二人とも。私はフェイト・T・ハラオン。貴方達は？」

「俺はエクス・ハルート。そんでこっちは……」

「……サクヤ・キツキだ。」

「サクヤに、エクスか。本当は戦闘の協力をしてくれてお礼をいいたんだけど、局員の注意を無視したことで、色々と注意を……」

「あー、フェイトちゃん。実はこの二人ちょっと訳ありというか……今はやてちゃんの所にお客さんって来てる？」

「あ、うん。何だか着物を着た女の子が来てるけど……もしかしてサクヤとエクスの知り合い？」

フェイトが二人にそう聞くとエクスが答えた。

「その女の子って、着物に扇子とか持ってなかったか？あと感じが胡散臭い感じの……」

「う、胡散臭いって……何か変わった感じがしたけど……」

フェイトが苦笑いしながらエクスはため息を付いた。するとサクヤが勝手に隊舎の中に入っていった。

「あ、ちょっと、」

「おい、サクヤ。勝手に行動するなよ。」

「ボスがここにいるというのなら、早いところ俺たちをここに呼び寄せた理由を聞きたい。」

サクヤはそう言って先に歩いて行った。エクスはまたため息を付いて、なのはとフェイトに謝った。

「悪いな。サクヤの奴、ああいう性格で……」

「ううん、大丈夫だけど」

「逆にエクスが苦労してて、体とか大丈夫かなって思うよ。」

となのはとフェイトが言うとエクスは少し嬉しそうにしていた。

エクス達は先に行ったサクヤと合流をし、二人のボスがいる執務室の前にいた。なのはは扉をノックすると返事が返ってきた。

「はいはい、入ってええよ～」

「失礼します。はやて部隊長」

なのはとフェイトが部屋に入り、サクヤとエクスもその後を付いて行くと、部屋の中には茶髪のセミロングの女性と銀髪の小さい少女がいた。

「もう、なのはちゃん。その部隊長はやめてって言ってるのに……
…それでそこの二人がそうなんや。」

「うん、サクヤ・キツキとエクス・ハルート。確かはやてちゃんのお客様の関係者だって二人から聞いたけど……そのお客様は？」

なのはが部屋の中を見ると、はやて達二人しかいなかった。すると

突然後ろから声がかけられた。

「そのお客様は私のことだよ。エースオブエース」

なのは達が後ろを振り向くとそこには銀色の髪を後ろに縛って、赤い着物を着た少女がいた。一見大人しそうな感じがするが、なのはとフェイトは少女からただならぬものを感じ取っていた。

（フェイトちゃん。彼女……）

（うん、最初会ったときはおかしな感じがしなかったけど、私やなのはに気がつかれずに後ろに立つなんて……）

「ふふ、そう警戒しなくていいわよ。高町さん、それにテスタロッサさん。」

「えっと、はやてちゃん。彼女は……」

「うん、私のお客さんで、そっちの二人の上司である。フーレ・ラインさんや。」

「気軽にフーレと呼んでくださっていいですよ。」

フーレは笑顔でそう言うが、なのはとフェイトはさっきのフーレのスキルが気になっていた。

「あの、いきなり私たちの後ろに現れたのは……」

「あぁ、あれね。ちょっとした悪戯よ。あとはそこの馬鹿な部下にお仕置きかしら」

「「へっ？」」

なのはとフェイトがサクヤとエクスを見ると、二人は頭を抑えていた。

「ボス、いきなりそれはないからな。」

と怒るエクス。サクヤに至ってはまだ痛がっていた。

「あらあら、サクヤはまだまだね。」

フーレは来客用の椅子に座り、扇子を拡げた。

「さて、八神部隊長。折角ですから私が提案した計画を話してあげましょう。」

「そやな。なのはちゃん、フェイトちゃん。それにサクヤくんにエクスくんも、これから同じ部隊で働く仲間やからな。」

「え、はやて、それどういう意味？」

フェイトがそう尋ねると、フーレが代わりに答えた。

「実は私やサクヤ、エクスの三人はとあるモノをとある奴らと奪い合いをしてるのよ。」

「とあるモノ？」

「えぇ、私たちはそれらを探している。多分貴方達は聞いたことが

ないだろうけど、ロストマジック。失われた魔法を探してるのよ。」

フーレは立ち上がり、さらに話を続けた。

「ロストマジックは禁忌の魔法。それらを見つけて封印しないといけないのよ。まぁその封印方法は企業秘密だけどね。それでロストマジックを利用しようとする者たちがいる。でも私たちはそいつらの尻尾さえつかめない状況。だったら管理局で情報を貰いながら行動しようと思ってね。もちろん、八神部隊長がやろうとしていることには協力する。その代わりに情報。ねぇ、いい提案でしょ。高町さん、テスタロッサさん。」

フーレはなのはとフェイトの二人を見つめると、なのはが先に答えた。

「分かった。でもそのロストマジック関係で動くのはフーレさん、サクヤくん、エクスくんの三人でいいんだよね。」

「えぇ、専門家にしか対処できないから、それに勝手に他の魔導師に動かれちゃ、ロストマジックに取り憑かれるからね。」

「それならいいけど、私たちの任務にも協力はしてくれるのよね」

「えぇ、それが条件でしたから。テスタロッサさんはどうかしら？」

フーレがフェイトに話を振るとフェイトは険しい表情を浮かべるが、答えた。

「私もそれでいいけど、もしも任務中にそのロストマジックを発見した場合は？」

「あぁ、それは考えてなかったわ。私か部下の二人に連絡してくれればいいわ。」

「そう、あとそのロストマジックってどれくらいあるの？」

「そーね、エクス。教えてあげなさい。私はめんど……しゃべり疲れたわ。」

（（（今、めんどくさいとか言いそうになった））））

なのは、フェイト、エクスの三人は心のなかでそう突っ込むのだった。エクスはため息を付き、エクスのデバイス『ハルグリット』から七つの文字が浮かび上がり、エクスはそれを読み上げた。

「『時の波紋』『死を免れない人間の運命』『氷に覆われた世界』『宵の月』『深淵を貪りし者』『黄道十二宮』『狂った運命の歯車』それらがロストマジックだ。内一つの『時の波紋』は俺達が所持、俺達の敵が所持してるのは『宵の月』と『氷に覆われた世界』の二つ。あと『黄道十二宮』は世界線を移動してるから存在はしない。ボス、それでいいですか？」

「えぇ、上出来よ。まだ見つけてないロストマジックは３つ。それらは名前通りの力を発揮してるから分かると思うから。」

フーレとエクスの話を聞いたなのはとフェイトの二人は驚きを隠せずにいる中、はやては立ち上がり、この場にいる全員に宣言した。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。これらを私たちが見逃せば、知らない誰かが傷つくことになるんや。だから私はこの人達に協力す

るんや。二人はええか？」

「うん、いいよ。」

「私も、はやてが言ったとおりに事態が深刻になる前にどうにかしたいと思ってる。だから私も協力する。」

「ありがとうな。二人とも。それじゃあ、フーレ。部隊長としてフーレ達の部隊名を決めてええか？」

「えぇ、ご勝手に」

「それじゃあ、部隊名ロスト。でええか？」

「ええ、気に入ったわ。」

こうして部隊ロストが設立のするのだった。

第2話　部隊名　ロスト（後書き）

六甲水「第2話でした。」

フーレ「ふふ、ロストマジック全部出せるの？」

六甲水「多分」

エクス「自信なさ気だな」

六甲水「とりあえず、次はキャラ紹介です。ロストマジックの能力も紹介します。」

第3話　模擬戦ＩＮロスト部隊（前書き）

六甲水「今回はサクヤ達ｖｓヴィータ＆シグナムの模擬戦だよ。」

フーレ「それに私のロストマジックの一部の能力が発揮するのよね。」

六甲水「まぁね」

第3話　模擬戦ＩＮロスト部隊

ロスト部隊設立から数週間が経った。ロスト部隊はロストマジックの収集が目的のためそれ以外の雑務などは一切行うことがないため……というよりフーレが雑務などを嫌うためか機動六課では窓際部署と呼ばれていた。

「なぁ、サクヤ。」

エクスは暇そうにしながら、刀の手入れをしているサクヤに話しかけた。

「何だ？エクス」

「暇なんだが……」

「……俺達はロストマジック専門だ。それ以外の仕事はボスが行わないと決めたんだから当たり前だろ。」

「そのボスはフェイト隊長やはやて部隊長と一緒に本部に行ってるんだろ。俺も付いていけばよかった。」

「俺は刀の手入れをできるからいいけどな。」

「はぁ、お前はそういう風に何も考えずにいられて羨ましいよ。そういえば話変わるけどお前最近入った新人見たか？」

「いや、四人いるというくらいしか聞いていないが……」

「結構良い線行ってる奴がいるらしいぜ。折角だから」

「観に行かない。」

エクスの提案を一蹴するサクヤだったのだ。エクスはため息を付き窓から空を見上げるていたのだった。すると……

「おっ、ロスト部隊の二人はまだいたか。」

二人を訪ねてきたのは赤毛の少女、スターズの副隊長ヴィータだった。ヴィータは隊の制服ではなく訓練用の服を着ていた。

「あれ？ヴィータじゃんか。」

「エクス。あたしは一応お前の上司なんだぞ。」

ヴィータは不機嫌そうに言うとサクヤは刀を鞘に収めて、ヴィータに尋ねた。

「ヴィータ副隊長。俺達に何か用か？」

「あぁ、なのはがお前らのことを呼んでたんだ。何か改めて二人の力を見たいからって」

ヴィータの後を付いていく二人は訓練場にたどり着いた。サクヤは至って普通にしていたが、エクスはめんどくさそうにしていた。

「おいおい、サクヤ。わざわざ訓練なんか参加しなくても……」

「……副隊長の命令だ。俺はそれに従ったまでだ。」

「はぁ、お前は上司の命令は絶対主義だったな。」

「そういえばお前ら、何であのフーレとか言う奴と一緒にいるんだ？」

ヴィータが二人に素朴な疑問を投げかけると、サクヤが答えた。

「俺の場合はボスへの恩返しだ。」

「恩返し？」

「あぁ、俺は気がついたら一人で廃墟の中にいた。きっと親にもでも捨てられたと思った。そんな時ボスが俺を拾い、魔法など色々と教えてもらったんだ。それが一緒にいる理由だ。」

「サクヤ、お前見掛けと違ってよく喋るな。」
「サクヤは基本無表情だけど、意外としゃべるぜ。まぁ無表情の所為か勘違いされやすいけどな。」
エクスがそんな事を言うと、サクヤは睨んできた。エクスはため息を付き自分の事情を話した。
「俺はフーレ……ボスとの出会いはサクヤみたいな感じじゃなかったな。たまたまボスの戦いを見てそれに惚れたみたいな感じだよ。それで前いた部隊を抜けて、ボスと一緒に行動することにしたんだ。」
「何だ？どっかの部隊にいたのか？」
「あぁ、今は壊滅しただか何だかしたとか聞いたけどな。」
三人がそんな話をしていると、教導隊の制服を着たなのはがこっちに向かって何か呼んでいた。三人はなのはの所に向かった。
「ヴィータちゃん。ありがとうね。サクヤくんやエクスくんもわざわざありがとうね。」
なのはがそうお礼を言うとサクヤは無表情に言った。
「高町隊長。俺達の戦いを見たいという話だが……相手はそこの四人か？」
サクヤがなのはの後ろに並んでいる四人を見て言った。するとなの

はが笑顔で答えた。

「違う違う。相手はヴィータちゃんとシグナムさんだよ。フォワードのみんなにはその見学かな」

「シグナム副隊長？どこにいるんだ？」

エクスがそう言うとヴィータが苦笑いをしていた。

「シグナムのやつなら、お前らとの戦いが楽しみで先に準備してるよ。」

「それなら、俺達も早速準備をするぞ。エクス」

「マジでやるのかよ。たくっ、」

サクヤは内心楽しみしていた。エクスはめんど臭がっていたのだった。

サクヤとエクスがバリアジャケットに着替え、訓練場の中に入った。そこには騎士甲冑を纏ったピンク髪の女性……シグナムとヴィータが待っていた。

「来たか。ロスト部隊」

「待たせたな。」

シグナムとサクヤがそんな事をいう中、エクスはヴィータに質問した。

「そういえば、なのは隊長は参加しないのか？俺達の戦闘力とか調べるのに見学つうのはな……」

エクスがそう言うとヴィータは少し神妙な顔をしていた。

「あ、あいつにはああ言ったことはさせたくないんだ。それより、エクス。さっきまでやる気無さそうだったのに、今はやる気ありそうだな。」

「俺的にはここまで言ったらやるしか無いって思ってるからな。」

「そうか、あっちの二人はもう我慢できそうにないし始めようか。」

「あぁ、」

ヴィータはなのはに始めるように指示をし、なのはの模擬戦開始の

合図が訓練場に響いたのだった。

訓練場の外側で見学をするなのはとフォワードの四人。なのはが四人にある質問をした。

「みんなはどっちが勝つと思う？」

すると青い髪の少女、スバルが真っ先に答えた。

「多分シグナム副隊長たちだと思います。えっと、サクヤさんやエクスさんが強くても勝つイメージが出ないといいますか……」

次に答えたのはオレンジ髪の少女……ティアナだった。

「私はロスト部隊の二人かと思います。六課でロスト部隊は強すぎて切り札だって聞いたことがありますから」

次に答えたの桃色の髪の少女……キャロだった。

「私はスバルさんと同じ副隊長達かと……理由も同じですが……」

最後に答えたのは赤い髪の少年……エリオだった。

「僕はティアナさんと同じロスト部隊かと思います。何となくですけどすごい力とかありそうな感じがして……」

四人が答え終えると、模擬戦の方に動きがあった。

「サクヤ、作戦通りにやるぞ。」

「あぁ、ゼーガ。主砲モード。」

『了解。サクヤ』

黒い鈴型のデバイス、ゼーガがサクヤの呼びかけに応え鈴から黒い杖に形を変え、サクヤは後方に下がった。それを見て、ヴィータとシグナムは驚いていた。

「あいつ、砲撃手でもあるのか？」

「あぁ、そうらしいが、ヴィータ。サクヤは私がやる。」

「おっと、それはさせないぜ。」

シグナムがサクヤの元に向かおうとした瞬間、エクスが足止めに入った。だが、それだけではなかった。エクスはヴィータの方にもいたのだ。

「なんだ？エクスが二人いやがる。」

ヴィータがエクスが二人いることに驚いていた。エクスは笑いながら答えを言った。

「秘技分身殺法と言った具合だ。ちなみに分身だからってもう一人が弱いとは限らないぜ。今はサクヤの奴が魔力を貯め終わるまで足止めさせてもらうぜ。」

見学をしていた五人もエクスの分身を見て驚いていた。

「す、すごいよ。ティア。分身だよ」

「分かってるわよ。でもあれって魔法で作った分身とかじゃないの

？」

「ううん、多分ちがうとおもう。ちゃんとした人としてヴィータ副隊長と戦ってる」

「そうね、高町隊長の言うとおりよ。エクスの分身はスキルの一つなのだからね。」

ティアナの予想をなのはが否定すると、突然現れたフーレがエクスの分身について答えた。

「フーレ隊長。いついたんですか？」

「ついさっきよ。サクヤとエクスの魔力を感じたからね。それより高町隊長。こんな面白そうなこと私も誘って欲しかったわ。」

フーレがむくれながら言うとなのは苦笑いをしていた。

（フーレ隊長って、大人っぽい風に見えて子供っぽいところもあるよね）

「くっ、カートリッジロード。紫電一閃」

シグナムがカートリッジをロードし、必勝の一撃をエクスに当てようとするが、エクスは鎌を回転させた。

「なら、こっちもロードカートリッジ。エレトリカルサイズ」

エクスの必勝の一撃は白い鎌、ハルクリッドに電気を纏わせながら鎌を回転させ、電磁波を相手に当てるという技だ。エクスの鎌とシグナムの同時にぶつかり合った瞬間、ヴィータが戦っていた分身体が姿を消した。

「分身を解いた!?これならサクヤの所に……ってなんだあれは……」

ヴィータがサクヤの方を見ると、サクヤの杖の先端に巨大な黒い魔力弾が貯め終わっていた。それを見て、エクスが焦っていた。

「待て、サクヤ。フルバーストはまずいから」

「全てを撃ち滅ぼせ、アサルトフルバースト」

サクヤが黒い魔力弾放とうとした瞬間、見学していたフーレが咄嗟に懐から白い小瓶を取り出した。

「ちょっとやり過ぎよ。サクヤ。」

フーレから白い光が現れた瞬間、サクヤが気絶していたのだった。

模擬戦から３０分後、フーレがサクヤに説教をしていた。エクスとなのは達はそれを遠くから眺めていた。

「さて、いくら模擬戦とはいえフルバーストを使うのは禁じていたはずよ。」

「済まない。ボス。」

「あの技は集団戦での戦いには向いてるけど、味方巻き込むから使わないように言ったはずなのに……はぁ、」

「済まない」

フーレはやれやれとした顔するとエクスに声をかけた。

「エクス、明後日仕事があるわ。」

「仕事？ロストマジック関係か？」

「いいえ、八神部隊長からさっき聞いたから、六課でホテルの警備よ。」

第４話　ホテルでの決闘（前書き）

六甲水「今回はいきなりホテルから始まります」

サクヤ「いきなりだな」

六甲水「まぁね」

第4話　ホテルでの決闘

ホテルアグスタ

到着したスバル達は警備を始めた。オークションが行われる会場の入口では、チケットを受付の男に見せて次々と人が入っていく。一人の女性がチケットではなく、機動六課の身分証を見せた。

「あっ！」

身分証を見た受付の男は驚いた。

「こんにちは。機動六課です」

はやて、フェイト、なのはが綺麗なドレスを着ていた。そしてその三人の後ろには普段と変わらない着物を着たフーレが扇子を扇いでいた。

「やはり、こういう場所は私には苦手ね」

「フーレはサクヤ達と一緒に警備に回っても良かったんじゃないのかな？」

フーレがそう愚痴っているとフェイトが苦笑いしながら言ってきた。だが、フーレは直ぐに余裕そうな顔をした。

「あら、警備なんて嫌よ。そういうのは部下である彼らに任せるのが一番なのよ。それに案外こういう場所にロストロギアと混ざってあるかもしれないじゃない。」

「そ、そうなんだ。」

「所でフーレ。そのロストマジックについてなんやけど、フーレ達と敵対してる組織と私らが遭遇して戦ったとき……私らに勝つ見込みはあるん？」

はやてが険しい表情をしながら聞くと、フーレは扇子をたたみ軽い感じで言った。

「無理ね。いくら魔力が高くても、今の魔法ではロストマジックの脅威に太刀打ちが出来ない。ロストマジックにはロストマジックで立ち向かわないとね。」

ティアナは、ホテルの周辺を警備していた。すると、ホテル内にいるスバルから念話がきた。

（今日は、八神部隊長と守護騎士団全員集合かぁ）

（そうね。あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長の事…）

周辺を確認しながら、スバルに聞いた。

（うん。お父さんやギン姉から聞いたことぐらいだけど……。八神部隊長が使ってるデバイスが魔導書型で、それの名前が夜天の書。副隊長達とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力。で、それにリインフォース部隊長補佐を合わせて６人揃えば、無敵の戦力って事。まぁこんな所かな）

スバルが説明を終えた。

スバル（ティア、何か気になるの？）

ティアナ（別に）

スバル（そ。じゃ、また後でね）

スバルとの念話は終わった。ティアナは一人考え込んだ。六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。隊長格全員がオーバーＳ、副隊長でもニアＳランク。他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばっかり。あの年で、もうＢランクを取ってるエリオと、レアで竜召喚士のキャロ。危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップのあるスバル。そ

して、シグナム副隊長達と戦い中断されたとしてもSランククラスの実力を持つロスト部隊のメンバー

（やっぱり…うちの部隊で凡人は私だけか……。）

ティアナは静かに目を閉じる。でも、そんなの関係ない。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

（私は、立ち止まるワケにはいかないんだ。）

ティアナが改めて決意した時、

「精が出るな。ティアナ」

森の中からエクスがやってきた。

「エクスさん。どうしたんですか？」

「いや、どうせ警備が一杯いるんだから俺一人サボっても平気だろうなと思ってな。」

「サボリですか。フーレ隊長に怒られますよ。」

「いいの、俺は基本働かなくっても、それに俺の分まで働くサクヤがいるしな。」

エクスはそう言いながら笑っていた。そんなエクスを見てティアナはつい笑みがこぼれてしまった。

ホテルを囲む森。森の中を走る集団があった。ホテルへ向かって、真っ直ぐに森の中を移動してるのは、ガジェットの集団だった。屋上で警備をしているシャマルのクラールヴィントが反応した。

「シャーリー！」

シャマルが叫んだ。

「はい！」

管制室にいるロングアーチのメンバーのシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーが返事をした。管制室でも、ホテルに接近しているガジェットを感知した。ティアナがシャマルの近くまで駆け上がった。

「シャマル先生！私も状況を見たいんです。前線のモニターもらえませんか？」

「了解。クロスミラージュに直結するわ」

シャマルはモニターを回した。モニターをもらったティアナは、エクスのもとに駆け寄った。

「ティアナ、どうやら敵襲みたいだな」

「はい、私はスバルと合流します。エクスさんは？」

「俺はもちろん、さっさと終わらすぜ。」

エクスはハルクリッドをサイズモードに変え、回転させていた。

「ロードカートリッジ。エレクトリカルパニッシャー」

エクスがハルクリッドを激しく回転させるとエクスの頭の上に白い球体が現れた。エクスはそれを接近してきたガジェット全てに爆発した。

「ＡＭＦだか何だか知らないが、機械相手なら楽に倒せるんだよ。」

「す、凄い」

ティアナはエクスの戦いを見て驚いた。すると遅れてきたスバルが到着した。

「ティア、お待たせ。エクスさんも」

「おう、一気に終わらせるぞ」

「私が大型を潰す。お前は細かいのを叩いてくれ」

「おおよ！」

シグナムは地上に降りて、大型と対峙する。

「行くぞアイゼン！」

空中にいるヴィータは、八個の鉄球を出した。

「まとめて、ぶち抜けェエエ！！」

グラーフアイゼンを振り、八個の鉄球を打ち放った。全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。

「レヴァンティン！」

カートリッジロードをし、炎が刀身を包む。

「紫電一閃！！」

レヴァンティンを上段から振り下ろし、大型ガジェットを破壊した。

「ここは通さん！！」

ザフィーラの声の後に、地面から光の柱が現れ、ガジェット達を貫いた。

「凄い、隊長」

ティアナはヴィータ達の戦いを見て、少し、焦る気持ちが強くなった。

「召喚・・・来ます！」

キャロが敵召喚師の召喚を察知して紫色の四角い魔法陣が４つ現れ中から大量のガジェットが出て来る

「迎撃いくわよ！」

「はい！」

ティアナの言葉にスバル達が応えた。ティアナは、ガジェット達にクロスミラージュを向ける。魔力弾を撃つがＡＭＦのせいで当たりが浅い。更に撃つが有人操作になったらしく攻撃は避けられてしまう。

「ちっ！」

ガジェットがミサイルを撃つと、ティアナは冷静に全て撃ち落とす。

「ティアナさん！」

キャロが叫ぶ。すると、ガジェットが光線を撃って来て、ティアナはジャンプして回避する木を盾にしてガジェットの様子を見る。

（防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！）

シャマルが念話で、スバル達に伝えた。ティアナの表情が険しくな

る。

「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全部倒します！」

（ちょっと…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！）

「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから！」

そう言いながら、クロスミラージュを構える。ティアナは、スバルに顔を向けた。

「エリオ、センターに下がって！私とスバルのツートップでいく！」

「は、はい！」

言われた通り、エリオ達は下がった。

「スバル！クロスシフトA、いくわよ！」

「おお！」

スバルはウイングロードを使って、ガジェット達の注意を引き付ける。その隙にティアナは、カートリッジを四発もロードした。証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくたって…どんなに危険な戦いだって。ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。

「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

クロスミラージュを構える。

「クロスファイヤーーー」

スバルは、ガジェット達の攻撃を避け続ける。

「シュート！！」

オレンジ色の魔力弾が、一斉にガジェット達に迫る。次々とガジェット達に魔力弾が当たり、倒していく。だが、魔力弾が一発反れて、スバルに迫る。

「まずい。直撃する。」

魔力弾がスバルに迫ったきた。だが、スバルに当る直前サクヤが空から降りてきて、魔力弾を真っ二つに切り裂いた。

「……危ないところだったな。」

「あ、はい。」

「サクヤ。ナイスだ。」

「ランスター。」

「え、あ、はい」

サクヤはティアナを睨んだ。ティアナはきっと怒られるかと思った。だが、サクヤは軽くティアナの頭を撫でた。

「今のはやるべきではなかった。だから次から気をつけろ。」

「え、あ、お、怒らないんですか？」

「その役目はヴィータ副隊長や高町隊長の役目だ。俺の役目じゃない。そうだろ、ヴィータ副隊長」

サクヤがある方向を見るとそこにはヴィータがいた。ヴィータはティアナを睨んだ

「バカヤロウ。今のは完全に直撃コースだぞ。何で私を待てなかった。」

「す、すみません。」

叱られるティアナ。だがそこにエクスが間に入った。

「悪い。俺の指示だったんだ。いやー、まさかこんな事になるなんてな。あはは」

「エクスの指示？……分かったそういう事にしておく。ティアナ、お前は休んで……」

ヴィータがティアナの方を見た瞬間、ティアナの後ろに黒いコートを着た人間が紅い剣をティアナに振りかざそうとしていた。

「ティアナ、逃げろ」

「えっ？」

ティアナが振り返った瞬間、剣が振り落とされていた。ティアナは突然のことで動くことが出来なかった。だが、切られてはなかった。

何故ならエクスがハルクリッドで剣を受け止めたのだ。
「よぉ、不意打ちはないんじゃないのか？なぁ、」
「……」
コートの人間は後ろに下がると、フードを外した。フードを外した素顔は黒い髪に整った顔立ちの少女だった。
「……ごめんなさい。貴方達をここで死んでもらいたいんです。お礼に機械人形はすべて破壊しておきました。」
「それはありがたいけど、死ぬわけには行かないな。」
「それにお前たちから姿を見せるとはな。ドーマ」
サクヤとエクスがデバイスを構えた。少女は無表情で剣を構える。
「ドーマ？おい、サクヤ、エクス。こいつはまさか……」
「あぁ、俺達の敵対組織ドーマ。こいつはその一人だ。」
「はい、私はドーマが一人　アリエッティ・ドーマです。そしてこの子は私のロストマジック『宵の月』です。」
アリエッティが律儀に自己紹介をした。だが、後ろに下がっていたヴィータやフォワードメンバーは彼女から感じた魔力に恐怖をした。
（なんだ？この魔力は……一瞬で飲み込まれる。くそ、サクヤとエクスは何で平気なんだ）

「悪い、ヴィータ副隊長。フーレを呼んできてくれ。俺達じゃ倒しきれるか分からないんだ。」

「だけど……」

「いいから、全員が束になっても倒せない。」

「くっ、直ぐに呼んできてやる。」

ヴィータは直ぐにフーレの元に向かった。ティアナ達は動けずにいた。それをみてエクスは……

「ティアナ、悪いが一歩も動くな。既にこいつの間合いに入ってる。」

「楽に殺してあげるね。」

ロストマジック使いの戦いをこの時ティアナ達は目撃する。それは圧倒的な強さというものを……

第5話　宵の月（前書き）

六甲水「今回は宵の月の能力が明かされます。」

フーレ「私の出番があるということね。」

第5話　宵の月

突如、フォワードメンバーとサクヤ達の前に現れたのは宵の月の所有者・アリエッティ・ドーマだった。アリエッティは紅い剣を構える中、サクヤは黒鴉を、エクスは鎌を構えた。

「ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、フリード。絶対に動くなよ。それに援護しようとも思うな。これは戦いじゃない。殺し合いになる。」

エクスがティアナ達にそう叫ぶ。するとアリエッティはくすくすと笑った。

「大丈夫ですよ。お二人を殺したら直ぐにあの娘達も殺します。だって、宵の月がそう言ってるもの」

アリエッティは剣を軽く振った瞬間、森の木々が全て切り倒された。

「さぁ、始めましょう。殺し合いを」

アリエッティが軽く微笑んだ。その瞬間サクヤがアリエッティの懐に、エクスはアリエッティの背後に回った。

「……もらった。」

「先手必勝。」

二人が同時にアリエッティに斬りかかった。だが、二人の刃はアリエッティに届かなかった。

「ちょっと驚きました。ですが……無駄です。」

サクヤの刃を紅い剣で防ぎ、エクスの刃はもう片方の手で受け止めていた。サクヤとエクスは急いで下がった。だが、

「ぐぅ」

「がは」

二人の背中が切り裂かれ、血が吹き出していた。アリエッティは微笑んでいた。

「血が出てますよ。無理はしないほうがいいですよ。」

「くっ、エクス。大丈夫か？」

「あぁ、ロストマジックを使われる前に仕留めたかったが……それでもこいつ強すぎだぜ。」

エクスの言葉を聞いて驚愕するティアナ達フォワードメンバー。シグナム達と互角にやりあった二人を相手にアリエッティは魔法を一切使っていなかった。

「エクスさん。やっぱり……」

「手を出すな。殺されるぞ。」

「で、でも……」

ティアナは必死に手を貸そうとするが、エクスはそれを止めた。
「見てたろ。こいつの強さは異常だ。異常すぎる。お前たちが敵う相手じゃない。」
「え、エクスさん」
エクスの言葉を聞いて、何も出来ずにいたティアナだった。そんな中サクヤはゼーガをロッドモードに変えた。
「エクス。一分稼げるか？」
「おいおい、無茶言うぜ。この女相手に一分じゃ駄目だろ。３分稼いでやる。三分後に一気に決めろ」
「あぁ、」
サクヤは直ぐにロッドの先端に魔力を溜め始める。エクスは時間を稼ぐためにアリエッティに攻撃を仕掛ける。
「エレトリカル・パニッシュ」
白い魔力弾を何十発も放つエクス。アリエッティはそれらを全て切り裂いた。だが……
「あれ？鎌は？」
アリエッティはエクスが持っていたハルクリッドが無いことに気がついた。すると、エクスは……

「雷撃魔鎌」

アリエッティの後ろに激しく回転するハルクリッドがあった。アリエッティは直ぐにそれに気が付き、剣で弾こうとするが……

「甘いぜ」

ハルクリッドから白い鎖が伸びてアリエッティを拘束した。エクスはハルクリッドを拾い上げ、鎖の先端を地面に突き刺した。

「くっ、この程度の鎖なんて……」

「3分。やれ。サクヤ」

「あぁ、サクリファイス…・……」

サクヤはロッドの先端をアリエッティの額に当て、そして黒い光が大きくなり始める。

「ブレイカアアアアー」

黒い魔砲がアリエッティごと地面を抉り、放った場所一帯はすべて焼け野原になった。

「やったか？」

「あぁ、これで終わりだろ」

サクヤとエクスが安心した瞬間、二人の肩が斬りつけられた。そして二人の後ろに立つのはほぼ無傷のアリエッティだった。

「ちょっと油断しました。でも、もういいです。直ぐに殺します。人が月の魔力の前に魅了されて死んでください。」

アリエッティが紅い剣を地面に突き刺した瞬間、空から無数の光の矢が降り注いだ。

「ロストマジック『宵の月』破滅の序章」

光の矢が地面や木々に突き刺さると、腐っていった。宵の月は全ての生命力を吸い上げ、命を無くす魔法。サクヤとエクスはなんとか立ち上がり、動けずにいたティアナたちを障壁で守り続けた。

第6話　時の波紋（前書き）

六甲水「今回、ついにフーレの能力が判明します」

フーレ「やっとね。」

第6話　時の波紋

宵の月の攻撃を受けたサクヤとエクスはバリアジャケットは切り刻まれ、体中から血が流れていた。

「くっ、これがこいつの実力かよ」

エクスは膝を付きながらそう言った。するとアリエッティは……笑っていた。

「ふふ、血が沢山出てますね。この子は血が大好きですから……みなさんの血を飲ませてあげてください。そうすればこの子はもっと強くなる。」

アリエッティは不気味な笑みを浮かべた。するとサクヤがゼーガで攻撃を仕掛けた。だが、その攻撃はエリエッティの宵の月に防がれた。

「そうですか、最初に貴方が死にたいんですか。なら……お望みどおり」

アリエッティがそう言って、剣をサクヤに向かって振った。その場にいた全員がサクヤが切られたかと思ったが……

「全く、並の相手ならまだしも、こんなロストマジック使いに負けそうになるなんてね……不甲斐ないわね。二人とも」

突然、現れたフーレとアリエッティの前にいたサクヤがいた。フーレはというと着物姿でここに来ていた。

「まぁ、フォワードメンバーがいちゃ、守りながらになっちゃうわよね。大丈夫？みんな？」

フーレはそう言って、フォワードメンバーに微笑んだ。フォワードメンバーは何が起きたのかまだ分かっていなかった。するとフーレは扇子と小瓶を取り出した。

「さてと、今度は私が相手よ。お嬢ちゃん」

「今度はお姉さんが相手してくれるの？いいよ、遊んであげるよ」

アリエッティは楽しそうに笑い、宵の月を構えた。だがその瞬間、突然アリエッティの視界が逆転した。

「えっ、」

アリエッティが気がついたら地面に倒れていた。アリエッティは起き上がるとフーレは笑っていた。

「あら、どうしたの？そのロストマジックで遊んでくれるんでしょ？ねぇ、お嬢ちゃん」

「お姉さん。何したの？」

「別に……ちょっと体を押しただけよ。さらに……ここもね」

さらにアリエッティはいつの間にか空宙に浮いており、そのまま地面に落ちた。

「遊びで終わりそうね。」

「くっ、『宵の月』破滅の序章」

再び、アリエッティは無数の光の矢をフーレに向けて放った。だが、フーレはというと小瓶を取り出した。

「『時の波紋』時間停止」

その瞬間、フーレから見たもの全てが止まった。光の矢もそのまま空宙に固定されていた。

「教えてあげる。『時の波紋』は時を操る。時を5秒巻き戻し、これから先の時間を少しだけ見れたり、そして……今流れる時を止められる。最強のロストマジックといったほうがいいかしら？まぁ、貴方には聞こえてないでしょうね。」

フーレはそう言って、アリエッティの前に魔力弾を固定させ、時間停止を解除した。

「あああああああああ」

その瞬間、アリエッティは吹き飛んだ。

「さてと、回収させてもらうわよ。あなたのロストマジック。平和のために」

フーレはそう言いながら、アリエッティに近づこうとするとアリエッティはフーレを睨んだ。

「よく言うわ。あなたはただ……ロストマジックを使って、……するきだ。渡すもんか」

アリエッティが何を分からなかったが、フーレはゆっくりと微笑んでいた。

「いいから渡しなさい。」

「くっ、」

アリエッティは後ろに下がり、紅い空間を広げてそのまま姿を消すのであった。

第7話　戦いを終えて（前書き）

ホテル編終了です。そしてフーレが新たに手に入れたロストマジックの登場です。

第7話　戦いを終えて

機動六課

夕方、ヘリに乗り、機動六課に戻った。フォワード四人の前に、なのはとフェイトが立っている。

「今日の午後の訓練はお休みね」

「ゆっくり休んで、明日に備えてね」

「はい！」

なのはとフェイトの言葉に、スバル達は声を揃えて応えた。なのは達と別れ、スバル達は隊舎に向かった。

そして一方その頃、サクヤたちはというとフーレの部屋にいた

「見事にやられたわね。」

フーレがサクヤとエクスの治療をしながら呟く。するとサクヤは申し訳なさそうにしていた。

「すみません。隊長。」

「さすがにあの時はフォワードの四人を守るために頑張ったからな。とはいえ、さすがにきつかったぜ。」

「そうね、ロストマジック使いには普通の魔導師では勝てないわね。それも今回はかなりの使い手よ。私も脅しをかけていたから何とかなったけど……それはそうとエクス。貴方にロストマジックをあげるわ」

フーレはそう言って、ポケットから白い小瓶をエクスに渡した。

「フーレ、これは？」

「ロストマジック『深淵を貪りし者』よ。能力は影ね。まぁしっかり扱えるように頑張りなさい」

「あぁ、分かったぜ。それじゃあ俺は早速使えるように特訓してくるぜ。」

エクスは治療を終え、部屋を出て行った。残されたフーレとサクヤはというと……

「エクスも頑張るわね。それはそうとサクヤ」

「はい、隊長」

「貴方はよく使わなかったわね。使っていたら確実に倒せていたのじゃなくって？」

「すみません。あの能力はみんなを巻き込んでしまうので……」

「そうね、あれは扱いにくいし、ゼーガにも負担がかかるわ。でも、幹部が出てきた以上、貴方は本気で相手しなきゃいけないわ。」

「はい、」

「任せたわよ。サクヤ、いずれ貴方の体にある『狂った運命の歯車』は発動できるようにね」

グラナガンのとあるビルの屋上にアリエッティは傷ついた体で壁にもたれ掛かっていた。

「はぁ、はぁ、フーレ・ライン。時の停止は厄介すぎる。」

「随分と派手にやられたな。アリエッティよ。」

アリエッティの前には褐色の肌の巨漢の男が立っていた。

「ボス。十二宮の捜索は？」

「あぁ、十二宮はこの次元には存在しない。だから、アナザーに捜索させている。それよりその傷はどうしたんだ？」

「やられました。それもフーレ・ラインに」

「そうか、奴がいるのだな。裏切り者のフーレが。アリエッティよ。貴様は傷を癒せ。次のロストマジックの捜索はエネミーに任せる。」

「はい、了解しました。ボス」

「はぁ、はぁ、」

ティアナは一人、訓練に明け暮れていた。理由は今回の失敗だ。

「もう4時間経ったんだ。もう少しだけ……」

ティアナが訓練を再開しようと立ち上がると、森の奥から爆音が聞こえた。

「な、なに？」

気になったティアナは様子を見に行くと、そこにはエクスがいた。エクスの周りには黒い弾がいくつも浮かんでいた。

「『黒影の礫』」

黒い弾がエクスの前にある木々を撃ち貫いた。するとエクスは倒れてしまった。ティアナは直ぐにエクスのもとに駆け寄ると

「大丈夫ですか？」

「おぉ、ティアナか。お前も特訓か？」

「え、はい。」

「悪いんだけど、しばらく膝貸してくれ。動けそうにないんだ」

「え、あ、はい。」

ティアナはエクスに膝枕をしてあげた。初めての事だからかなり恥ずかしそうにしていた。

「あの、大丈夫ですか？」

「あー、かなり魔力使ったからな。しばらくは動けないな。」

「サクヤさん、呼びましょうか？」

「ん、いや、大丈夫。それより、ティアナって、ティーダの妹だよな」

ティアナはエクスの口から自分の兄の名が出てきたことに驚いた。

「兄さんを知っているんですか？」

「おう、元同僚だ。折角だから今回の失敗で無理して特訓をしているティアナに話してやるよ。ティーダと俺の事を……」

第7話　戦いを終えて（後書き）

次回はティーダとエクスの過去です。

第8話　忘れられない過去（前書き）

六甲水「今回はエクスとティーダの過去話です。」

フーレ「かなり久しぶりの更新ね。」

六甲水「色々とやってたからね。」

第8話　忘れられない過去

「エクスさんと兄さんの過去ですか？」

「まぁ、ちょっとしたな。」

とある世界でエクスとティーダは違法魔導師の捜索をしていた。

「ここにいるのか？」

「あぁ、そうみたいだけど……それよりティーダ。いいのか？」

「何がだ？」

「妹の誕生日が近いんだろ。家に帰ってやれよ。」

エクスはティーダからよく聞かされてる妹の事について話を振った。

エクスはティーダから写真でしか見たことがなかった。

「この任務が終わったら戻るさ。それより、エクス。お前はいいのか？」

「何がだ？」

「昇級試験断ったらしいじゃないか。お前、折角のチャンスを……」

ティーダがエクスに向かってそう言うと、エクスは笑みを浮かべていた。

「いいんだよ。俺は出世とか興味ないし、それにどうせならお前の下で働きたいからな。」

「全くお前は……」

ティーダは呆れた感じで言った。エクスとティーダは訓練生の頃からの親友で、よく一緒に任務を行っていた。

「それより、アイツか？」

エクスが違法魔導師の姿を発見した。魔導師はどこかの研究機関の前をうろついていた。

「そうだな。確保するか。」

「あぁ、」

エクスはハルクリッドを戦闘セットアップさせた。そしてエクスとティーダは同時に魔導師の元へ走っていった。

だが、それは何の前触れもなく起きた。

突然空から2つの影が落ちて来た。激しい爆音が鳴り止み、あたりを包んだ煙が晴れるとそこには二人の男がいた。

「ここがロストマジックが封印されていた場所だな。」

「あぁ、だが、既に封印は解かれ持って行かれたみたいだ。」

金髪の男が銀髪の男の質問に答えた。エクスは突然現れた男たちを警戒した。

（こいつら、何者だ？）

（エクス、動くなよ。こいつはかなりやばい感じがする）

二人は小声で話した。すると金髪の男がエクスたちが追っていた魔導師を発見した。

「ひ、ひぃぃぃぃ」

「貴様、この場所に何の用だ？」

「お、俺はただ、ここに凄いお宝が眠ってるって聞いて……頼む、命だけは……」

魔導師が必死に命乞いをする中、金髪の男は魔導師の頭をつかんだ。

「残念だが、俺たちを見たからには生かして返せないな。」

グシャッと何の前触れもなく魔導師の頭が潰された。金髪の男は血を拭うと、エクス達がいる方を見た。

「そこの奴ら……出てこい。貴様らも処理してやる。」

（馬鹿な。気づかれた！？）

（エクス。お前は急いで本部に連絡をとってくれ。俺が囮になる。）

（待て、お前はアイツらの強さを見て何も感じなかったのか？俺は感じた。アレは人間じゃない。悪魔だ。）

（だが、今どっちかが奴らの事を本部の人間に話さないと……俺は後から逃げるから……いけ！！）

（くっ、絶対に生きて帰ってこいよ。）

エクスはハルクリッドの能力の一つ、『インビジブル』を使用し、その場から逃げ出した。

エクスは急いで、本部に連絡しティーダの救出を願い出た。だが、エクス達救出部隊がたどり着いたときには……ティーダは腹を貫かれ、死にそうであった。

「ティーダ！しっかりしろ。医療チーム、早く治療を……」

「エクス、いいんだ。もう俺は長くない。だから、お前に伝える。あの金髪と銀髪の男たちのことを、奴らは悪魔じゃない。俺たちと同じ人間で……魔導師だ。だが、奴らの力は異常だ。本部は奴らのことを公にしない。」

「ティーダ、もう喋るな。」

「エクス。最後の頼みだ。妹を……ティアナを守ってくれ……お前ならできるはずだ」

「ティーダ、ティーダ！」

ティーダは息を引き取り、エクスは本部にティーダと遭遇した男たちについて話した。その結果、奴らに対抗するまでは、男たちの事は公にしないということになった。そしてエクス達は任務失敗という事で、ティーダは世間に非難され、エクスは自分から管理局をやめようと思っていた。そんな時にフーレとの出会いを果たすのであった。

「それが、あの事件に隠された真実であり、俺とティーダの過去だ」

エクスが話し終えるとティアナは泣いていた。

「兄さんは……エクスさんたちは……そんな辛いことを……」

「あぁ、俺はフーレと行動している理由は、ティーダを殺したヤツらを殺すことだ。それが出来れば俺は……」

エクスは何かを言いかけたが、その言葉は心のなかに閉じた。

「エクスさん。私もその金髪と銀髪の男たちと闘います。兄さんのために、それにエクスさんのために……」

「……無茶だけはするなよ。」

「はい、約束します」

フーレとなのはは一緒に宿舎から二人の会話を聞いていた。

「金髪と銀髪の男か。フーレは聞いたことあるの？」

「噂程度でね。でも奴らはドーマ一家よりも強敵らしいわよ。」

「どういうこと？」

「奴らは対ロストマジックに長けた能力を持っているらしいわ。私でも勝てないわ。」

「でも、いずれ戦う相手だよね。」

「えぇ、その時が来たらね。」

第8話　忘れられない過去（後書き）

六甲水「というわけで第三勢力の登場です」

フーレ「まだ名前が出てないわね。」

六甲水「とりあえず、その二人とエクスの闘いは休日編が終わってからやる予定だよ。」

フーレ「エクスに勝てるのかしら？」

第9話　六課の休日　前編（前書き）

六甲水「今回は六課の休日編です。ロスト部隊の休日はどんなかんじに……」

フーレ「まぁ、その前にいちゃつかせるんでしょ」

六甲水「まぁね。今回は基本的にエクスとティアナのいちゃつきだから、というかサクヤ、主人公なのに出番がないな」

第9話　六課の休日　前編

「クロスファイヤーシュート」

機動六課の訓練場ではティアナとエクスが朝練を行っていた。

「甘い。クロスシャドーシュート」

ティアナのクロスファイヤーをエクスは同じような技で、相殺する。さらに、エクスはハルクリッドを回転させながら、ティアナに接近し、ティアナのクロスミラージュを弾いた。

「また負けました。エクスさんもクロスファイヤーが撃てるなんて……」

「まぁ、意外と簡単な技だからな。多分高町隊長も使えそうだけど……というか悪いな折角の朝練に俺も邪魔して……」

「いいえ、私も一人で練習するよりは、誰かと一緒のほうがいいですし。」

「まっ、俺もだけどな。ロストマジックの方も使いこなせるようになってきたし、ありがとうな。ティアナ」

エクスがお礼を言うと、ティアナは突然顔を赤らめながら言ってきた。

「あ、あの、エクスさん。私のことは……その、ティアって呼んでください」

「むっ、何でだ？」

「そ、それは……その……」

「まぁいいや。ティア」

「は、はい。」

エクスに名前を呼ばれ、嬉しそうにするティアナ。

「朝からお熱いわね。」

「ティア、顔真っ赤」

突然現れたフーレとスバル。声をかけられたことにティアナは顔を真赤にさせていた。エクスは普段と変わらない表情をしていた。

「フーレ、それにスバルも、どうしたんだ？」

「朝起きたら、ティアの姿がいなかったから、朝練に行ったのかなって思って来たんだけど、途中でフーレさんとばったり会ってね」

「ふふ、朝からいいものを見れたわ。」

フーレはティアナを茶化していた。ティアナは茶化されてさらに顔を真赤にさせていた。

「も、もう、フーレ隊長。」

そして午前中の訓練が終わると、なのはからある提案が出た。

「みんな、訓練頑張ってるから、午後からはフォワードメンバーとロストメンバーは休日をあげます」

といった提案で、午後から休日となるのであった。そんな中、ティアナは勇気を出してエクスにあることを言った。

「あ、あの、エクスさん。」

「ん、何だ？」

「その、今日、私と一緒に行きませんか？」

「あぁ、別にいいぜ。」

「は、はい。それじゃあ、後で集まりましょう」

ティアナはそう言い残して、走り去っていった。そんな二人のやり取りを見ていたフーレとスバルは……

「フーレさん。」

「分かってるわ。スバル」

「「追跡しましょう」」

そしてサクヤはフェイトにある事をお願いされていた。

「ねぇ、サクヤ。お願いがあるんだけど……」

「何だ？」

「サクヤは午後からはどこか行こうとか考えてないよね」

「あぁ、何もな。」

「じゃあ、エリオとキャロの引率をお願いしていいかな？」

「……それが命令ならば……」

こうして、フォワードメンバーとロストメンバーの休日が始まろうとしていた。

「ここに魔力反応が……」

グラナガンのとあるビルの上に一人の男が街の様子を伺っていた。

赤い目に赤い髪を後ろで縛った男が……

「ロストマジックなのかレリックなのか……レリックならばスカリエッティに渡せばよいか」

「エネミー」

するとエネミーの後ろにアリエッティが姿を現した。

「アリエッティか。怪我はいいのか？」

「はい、ボスからはあなたと一緒に動けと命じられました。」

「そうか、それよりボスは？」

「はい、ボスは今、ロストマジックを破壊しようと動いている二人組を追っています」

「奴らか。」

「あの、奴らの事は私一切知らないのですが……」

「……奴らはロストマジックの破壊するために生まれてきた存在だ。もし奴らが戦うときはフーレ・ライン達と協力せよとボスは言っていた」

「分かりました。所で奴らの名前は？私は奴らとしか聞いていないので……」

「奴らの名前は色々とある。『神殺し』や『異端者』や『金髪と銀髪の悪魔』などと、ボスは奴らのことをこう呼んでいる『ゴスペル』

と」

そしてエネミーたちドーマがいる場所から遠く離れた場所には……

「さて、この街に反応があるんだな」

「あぁ、確実に破壊しないとな」

「破壊のために必要な犠牲もある。確実に使用者をロストマジックとともに破壊するぞ」

「あぁ、」

そこにいたのは金髪と銀髪の男たちであった。

こうして波乱を呼ぶ休日が始まろうとしていた。

第１０話　六課の休日　後編（前書き）

二ヶ月ぶりの更新です。今回はドーマとゴスペルの戦いが始まります。

第１０話　六課の休日　後編

ティアナとエクスが一緒に休日を満喫し、フーレとスバルがその後を追い、エリオ、キャロはサクヤがお守りしながら、それぞれ休日を満喫している頃、グラナガンの下水道では……

「はぁ、はぁ、」

一人の少女が足に付けられたアタッシュケースを引きずりながら、歩いていた。そんな少女のことを追うの……

「ねぇ、この子が『十二宮魔法』の鍵を握ってるの？実験から逃れた子供にしか見えないけど……」

「ボスの話では彼女は……らしいからな。」

「ふぅん、それって……が『十二宮魔法』を使っていたって言うこと？そんな話、私聞いたことないよ」

「知られていないことらしいからな。」

エネミーとアリエッティはそう言いながら、少女のことを見つめていると……二人はある気配を感じ取った。

「ねぇ、これって……」

「どうやら、招かざる者が来たらしいな。」

「まさか、こんなに早く会えるなんてね……ゴスペル」

「！？」

サクヤも何らかの気配を感じ取っていた。近くにいるエリオとキャロの二人は普通に楽しそうに話していた。

「この気配……絶大な魔力……エリオ、キャロ。悪いが、至急ボス……フーレに連絡を……」

「えっ、どうしたんですか？」

「何かあったんですか？」

「あぁ、少し気になる反応を感じて……ドーマ一族かもしれない。」

「それなら、僕らも……」

エリオがそう言うとサクヤは首を横に振る。

「駄目だ。お前らは他の奴らに連絡をしてくれ。どうにもこの下から嫌な感じがする。」

「この下って……もしかして下水道ですか？」

「あぁ、お前らは隊長たちに連絡をして、指示を待て。」

「「はい！！」」

サクヤはデバイスのゼーガを取り出し、バリアジャケットに身に纏い、近くにあったマンホールから下水道に入り込んだ。

『マスター。どうかしましたか？』

「この淀んだ魔力……ロストマジックを使うものがいる。それに……重苦しい魔力も……」

『重苦しい？それは一体……』

「さぁな。とりあえず、向かうぞ」

『了解』

サクヤは魔力をたどりながら下水道の中を走る。

しばらく走っていると、一人の少女と出くわした。少女の足には鎖が付けられていた。

「こいつは……ゼーガ」

『はい、どうやら、彼女が持っているアタッシュケースからレリックの反応が……』

「とりあえず、誰かに連絡をして保護を……」

サクヤはなのはたちに連絡を取ろうとすると、抱き抱えた少女がサクヤの服を握りしめた

「……パ、パ？」

「……ちっ、ここで誰かを待つよりは、一緒に連れて合流するしかないみたいだな。」

サクヤは少女の足に付いた鎖を切りはずし、レリックを回収し、奥

へと進んだ。

下水道の奥に進むと巨大な空間へと出てきた。するとそこでは何か激しい音が鳴り響いていた。

「戦闘か？一体誰が……」

サクヤは柱の影で様子をみるとそこには、紫色の髪の少女とリインフォースくらいの大きさの少女が二人。何かに襲われていた。サクヤは最初ドーマ一家かと思っていたが、違った。少女たちの前にいるのは金髪の男と銀髪の男だった。

「ひゃはは、スカリエッティの仲間か。てっきりドーマの奴らかフーレの一味かと思って攻撃しちまった。」

「だが、スカリエッティの仲間なら……情報をいくつか持っているな。小娘。大人しく貴様らが知っていることを話せ」

「つぅ、ガリュー」

人型の龍が金髪の男に襲いかかると、金髪の男は右腕を前に突き出し、そこから黒い魔砲を放った

「……！？」

人型の龍は攻撃を喰らい、そのまま地面に倒れてしまった。すると銀髪の男は……

「おいおい、この小娘。余計なことしかやらないみたいだぜ。殺しちまおうぜ」

「てめぇ、ルールーに手を出すんじゃねぇ」

小さな少女は銀髪の男に火球を放ち、銀髪の男に直撃する。だが、

「嘘だろ。無傷って……」

「駄目だ。もう殺したくってしょうがねぇや。」

「そうだな。情報も聞き出せそうにない。殺そう。」

二人の男の体から突然槍が現れ、二人は自分の体から出てきた槍を抜き、二人の少女に向けた。

「楽には殺しはしない。」

「お前が今まで生きてきた中で極上の痛みを与えてやる。」

「い、いや、いやあああああああ！！」

二人の男が少女に槍を振りかざした瞬間、サクヤはそれと同時に動いていた

ガキンッと音が地下空間に響いた。

「ほう、我らの攻撃を受け止めるとは……」

「てめぇら、何者だ」

「何故、お前らが……」

サクヤと一緒に二人の男の槍を防いでいたのは……アリエッティとエネミーのだった。

「フーレ・ラインの仲間か。」

「こんにちわ。ボスの命令でゴスペルと出くわしたら、あなた達と一緒に戦えっていう命令で……」

「そうか、だが、気をつけたほうがいい。こいつらは厄介だ。」

「なるほど、ロストマジックの所有者が三人も」

「これいいぜ。遊ぼうぜ。糞ども」

今、ゴスペルとの戦いが始まろうとしていた。

第１０話　六課の休日　後編（後書き）

次回、エクスが暴走します。そしてサクヤが持つロストマジックも発動です。

第１１話　ゴスペル　前編（前書き）

一ヶ月ぶりの更新ですみません。なのはＧＯＤの方でサクヤのロストマジックを出そうと思っているので、先にこっちで出します

第11話　ゴスペル　前編

地下空間にてサクヤはドーマ一族と共にゴスペルと対峙していた。

「足を引っ張らないでね。ロスト部隊」

アリエッティはそう言って、宵の月を発動させ、銀髪の男に斬りかかった。宵の月の力はサクヤも体験しており、その威力は絶大だと思った。だが、

「えっ！？」

「生ぬるいな。小娘」

銀髪の男は刃を人差し指で受け取っていた。アリエッティはそれに驚いていたが……

「隙があるぞ！」

サクヤはそう言って、刀を抜刀した瞬間、銀髪の男の脇が爆発した。エネミーはというと二人の攻撃を避けることもなく、ただ受け止めていることに違和感を覚えていた。

（何だ？あいつら……攻撃を受けて……楽しんでいる？）

すると銀髪の男はサクヤの魔法を受けてもなお、立ち上がり笑っていた。

「ふふ、ふはははは、てめぇら全然扱えきれてねぇな。兄貴、この

三人は俺が潰す。兄貴は先に帰っていてくれよ」

「任せたぞ。弟よ」

金髪の男はそう言って、一瞬で姿を消した。すると銀髪の男は……

「さぁ、さっきはテメェらに攻撃のチャンスをやった。次は俺の出番だ！」

銀髪の男は両腕を前に突き出すと、男の両腕は紅く染まった。さらには腕から紅い炎も出てきた。

「さぁ、喰らいやがれ！地獄の業火を！ヘル・イレイザー！！」

真赤な炎が集まり、四匹の龍にかわり、サクヤたちに襲いかかってきた。

「くっ、」

サクヤは炎の龍から避けながら倒れている少女の元へと駆けつけようとした。

「エネミー、どうしよう。私の魔法はアレには効かない」

「ならば……絶氷に司りし力よ。その全てを凍てつかせる力で、炎の龍を凍らせよ！ブリザード・スパイラル！」

エネミーは二匹の龍に向かって、絶氷の竜巻で龍を凍らせた。

「ロストマジック・氷に覆われた世界。その力は全てを凍てつかせ

る。」

エネミーの攻撃を見た銀髪の男は笑みを浮かべていた。

「なるほどな。まさか俺の最弱の攻撃を凍らせて楽しんでるとはな。だけどな、残りのやつは終わりだな。二匹の龍を消し去るなんて……」

「さぁて、どうかしら？」

銀髪の男がサクヤの方を見た瞬間、そこには無傷のサクヤとサクヤが抱きかかえる少女。そしてフーレがいた。フーレは扇子で仰ぎながら男を睨んだ

「こんにちわ。ゴスペルさん。こんな狭い空間で炎熱魔法を出すなんて……馬鹿がやることよ」

フーレはそう言いながら、銀髪の男に向かって扇子を投げつけた。男は扇子をただはたき落とすだけ

「こりゃ、ロストマジック使いが四人も揃いやがったか。いいぜ、おもしれェよ。」

「四人？五人だろうが！！」

どこからともなくエクスの声が聞こえ、銀髪の男が声が聞こえた方を見るとそこから黒い魔力球が飛んできた。

「おっと、なんで？影か？」

「その銀髪、その風貌。忘れるものか！ティーダの仇！ここでお前をぶっ殺す！」

「誰だ？テメェは………」

銀髪の男がそう言った瞬間、エクスは今まで抑えていたものが抑えきれず、黒い玉を取り出した。

「ぶっ殺す！ブッ殺す！ブッコロス！ロストマジック・深淵を貪りし者！深淵王の鎧！」

エクスがそう叫んだ瞬間、エクスの体が黒い塊に包まれ、黒く蠢く鎧の姿に変わった。それを見た銀髪の男は……

「ははっ、何だそりゃ！面白いそうな技持ってるじゃねぇか！でもよ、暴走してる状態じゃ俺には勝てないぜ！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

エクスは叫びながら男に向かっていくのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8146t/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　LOSTMAGIC

2012年1月6日20時52分発行